「活動の概要と研究成果」

NO.J2409

活動題目：メコン川中流域の先史時代の農業 –考古植物学の方法–

所属： 熊本大学社会文化科学教育部博士後期課程

氏名： SINGTHONG Sommay

本研究は、考古植物学的証拠の調査が十分に行われてこなかったメコン川中流域における、先史時代の稲作農業の起源と発展を検討するものである。現代の東南アジア社会において稲が中心的役割を果たしているにもかかわらず、ラオスにおける初期穀物栽培に関する考古学的記録は、長らく実質的なデータを欠いていた。本研究は、この空白を埋めるため、ラオスの先史時代遺跡から植物遺存体を回収するために、体系的な考古植物学的手法（土器圧痕分析、浮選法、探索的調査・発掘）を採用した。

フアプー洞窟で実施した主要な現地調査では、古代土器に残された稲粒を検出し、詳細な形態分析を行った。その結果、ジャポニカ米（O. japonica）および熱帯ジャポニカ米が優勢であり、野生種または未成熟な栽培品種を示唆する過渡的な形態の穀物も確認された。一方、インディカ米の欠如は、その導入が歴史時代になってからであった可能性を示している。

フアプー洞窟の土器片に残された稲粒圧痕の放射性炭素年代測定によると、その年代は紀元前2470±100年から紀元前940±50年の範囲に位置づけられ、ラオスにおける初期稲作農業は、長江流域や新石器時代タイの農業発展と同時期に展開していたことが明らかになった。さらに、野生種と栽培種の共存は、栽培品種が完全に受容される前に、在来種を用いた地域的な栽培実験が行われていたことを示唆しており、農業受容が複雑で動的なプロセスを経たことを裏付けている。

これらの発見は、東南アジアの稲作農業が単なる外部からの伝播の結果であったとする従来の仮説に疑問を投げかけるものであり、ラオスが稲作農業の初期拡大における積極的な参加者であった可能性を示している。方法論的には、本プロジェクトはラオスにおいて現代考古植物学的手法を体系的に適用した先駆的事例であり、今後の学際的研究のための再現可能なモデルを確立するものである。